

# ボディ・センサーによるフィールド・ワークとしての体育

徳山 郁夫<sup>2</sup>、松岡 信之<sup>2</sup>

<sup>1</sup>千葉大学教養部、<sup>2</sup>国際基督教大学教養学部

## The physical education as a “body-sensor” fieldwork

Ikuo TOKUYAMA<sup>1</sup> and Nobuyuki MATSUOKA<sup>2</sup>

<sup>1</sup>College of Arts and Sciences, Chiba University

<sup>2</sup>College of Liberal Arts, International Christian University

### 1. 緒 言

#### 1. 問題の背景.

今日の文明社会の中で、人々は発達した科学技術に依存して生きている。とりわけ情報社会と言われる中で、自分自身が行動するための情報までを自己の外部から提供されることに当り前になりつつある。このことは真理を追求する科学に問題があるのではなく、科学技術が発達した社会での教育に問題があるものと考えられる。

現代の科学技術は物事を計量し、分析することに特徴を持っている。この計量と分析を客観的に行うために様々な計器が工夫され、これらを駆使して新しい知識を生み出してきた。そして科学技術の発達は、従来人間自身の感覚に頼って行ってきた日常生活の中にも、専門家の知識や数量化する計器を導入してきたのである。

このように、日常生活の部分にまで、客観性を重視した計器や専門的な知識が入り込んでくると、自己流という自分の感覚には自信を失わざるをえないのである。こうして知らず知らずのうちに、科学技術とこれを駆使する専門家たちに自らの行動を依存する態度が形成されてきたのである。わ

れわれにとって最も身近な存在である「からだ」についてさえも、専門家の指示を仰がなければならないような所まで来ているのではないだろうか。

指示されなければ何もやらない。他から提供される情報に翻弄されやすい。あるいは、物事を客体化してとらえ、何事にも自分に関わらない態度をとる。これらは自分の生命や行動を機械や他人に依存して生きている現代人の特徴的態度のひとつとして指摘されるものであり、そこには自分の感覚に自信が持てなくなってきたという背景があることが考えられる。

#### 2. 研究の目的.

「運動する」ということが人間にとって必要不可欠なものであることの根拠は、身体運動と健康の関係から説明され、広く知られるところである。特に文明化する社会における循環器系機能の低下に由来する成人病との関係から、体育活動は健康の維持・増進という意味で大いに期待されている。このような社会における体育活動への期待は、増大する余暇時間と相俟って、スポーツを盛んなものとしていると言えよう。

しかし、このように健康に対して意識が高まりスポーツが盛んに行われる状況の中でも、多くの人々は自分自身で自己の健康を確認出来ず、外部情報に惑わされる、いわば健康過敏症とも言える状況に陥っていると見る事ができる。また、スポーツ場面でも、指導者に言われた通りに身体を操作することに終始していることが少なからずあるのも、自分の体が確認できないことの現れであろう。これは現代社会の科学的情報や技術、あるいは専門家に依存するという態度をそのまま体育活動の場面にも反映させていると言える。さらに、個体内に物質的な条件が満たされればよいとするような健康観、生命観が形成されつつあると考えられる。

科学技術が発達した時代の中で、身体を活用させる社会的な場は減少し、身体は極めて個人的な存在になりつつある。身体は個人の健康や外観的印象としてしか意識されず、運動するという側面が認識され難しくつつある。あらゆる場面に科学技術が応用されている社会の中で、不便な身体で物事に応じることは非効率なものとして意識され、一層、身体を活用を疎遠なものとしているのではないだろうか。自分の身体を動かして何かを行うという、人間にとってきわめて本質的なことを見失っているのではないだろうか。その結果、このような結論に陥ったとすれば、身体は権威ある者によって定義された健康な状態を保たなければならないだけの単なる物質となり、活用させる場のない厄介な存在になってしまうのである。

科学技術が発展した中で、本質的な健康観、人間観、生命観を見失いつつあることの要因を、体育活動が自らの身体、生命を扱いつつながら、その本質を追求し得なかったことと見ることはできないだろうか。科学技術が発達し、身体が日常生活から遊離した存在になればなるほど、自身の身体、生命を実感できる活動として、その特長を発揮することの責任は重大なものとなってくる。体育活動が物質としての身体を形成することのみに満足

したり、スポーツの技術を引き継ぐことだけに終始してはならない。体育活動の中心にある「運動する」ということを、別の視点からとらえることによって、現代の課題のひとつである自己確認がなされる可能性が見えるのである。

本論は体育活動がその本質を今日の教育の中で発揮するための考え方、すなわち現代の生活の中で自己の感覚に自信を取り戻す活動としての側面について探るものである。

## II. 「運動する」ことの意味の見直し.

人間は「運動する」システムである。しかし、ともすと「運動する」というイメージをエネルギー出力過程とその調整のみに固定しがちである。確かにそれは「運動する」場面が持つ独自性である。しかし「運動する」ということは、一つの生命体が環境との間に意味を見つけ応答することである。「運動する」ことを応答すべき意味の発見に始まり、応答としての筋活動として現れ、さらにその結果を吟味することに至る過程としてとらえなければならない。筋活動による出力の側面だけを取り上げるということは、人間を一つの生命体システムとして扱わないことになる。すなわち、結果だけの出力だけではなく、どの様に「運動する」かという計画、計画の遂行、結果の評価という過程が重要である。この過程で様々な認識が生じる。

認識とは「知る」ことである。認識の形成は、知覚活動からの情報、情緒的作用、知覚と行動の結果の記憶、知識などの情報処理としてなされる。「運動する」ことは、われわれが生きて行くために自分たちが置かれた状況を知り、状況に応じて行動を計画し、これを遂行して行くことである。すなわち、遂行に伴うエネルギーの出力やその調整という側面だけではなく「知る」ことが深く関与するものであり、「知る」ことの位置づけをせずに、「運動する」ことを考えることはできない。したがって、「運動する」ことの意味の見直しとして、運動を生起させ、これをコントロールする

「知る」ことへの関心を持たなければならない。

「運動する」ことには次のような認識が伴わなければならない。すなわち、運動を遂行する以前の状況、遂行すべき運動の計画、遂行の過程での状況の変化、さらに遂行された運動の結果の認識を必要とする。運動の成果は、このような事柄への認識の能力に大きく左右されるものであり、単にエネルギー出力の能力、あるいはその調整能力だけに由来するのではない。「運動する」ことを、自分の置かれた固有の状況への積極的な対応としてみるならば、その状況を把握するためには知覚情報に注意を傾けて認識を深めること、遂行過程全般にわたる状況の変化をよく認識することが、遂行する運動の成果に大きな関係を持つと考えられる。

もちろん、よく分からないままによい結果を得ることも有り得る。しかし、よく分からない場合に遂行される運動はその成果もよくないと考えられよう。滝沢<sup>(3,4,5)</sup>は、知覚情報が自己の運動に対する時空間の中で構造化されなければならないことを指摘している。すなわち、運動に伴う知覚情報が運動の遂行に対して意味を持つためには、知覚情報を解釈する枠組みが形成されなければならないとしている。

「運動する」ことに伴う認識の特徴は、とくに自己の知覚情報に注目しなければならないことである。自己の置かれた固有の状況を、知覚情報から理解しなければならない。応答すべき状況についての知覚と、応答としての運動を遂行する段階の知覚をいずれも自分で理解し、認識できることが必要である。この理解に必要な枠組みの形成は、自己の認識に基づいて運動を計画・遂行し、その結果を確認するという学習によってのみなされるものであると考える。

これらは取敢て大筋活動を連想させる「運動する」という言葉で表現するよりも、「行動する」という言葉で表現されるすべてのことに当てはまることである。しかし、自分が環境を操作する場

合は、自己の外部の世界に対する認識が必要とされるのに対して、自身が活動する場合には、自己の内部の世界についての認識を必要とする特徴を持つと考えられる<sup>(2)</sup>。ところが今日のように、日常生活の中で身体を活用させる場が狭められ、様々な科学技術を自己の手段として行動している状況の中では、「運動する」という、身体を媒体として行動し、自己の内部についての認識を深めることに特徴的な場もまた狭められていると考えられる。

「個の確立」という教育の目的に照らして体育の在り方を考えるならば、いかに正確な認識を形成できるかということこそ大切なことである。認識は外部から提供される知識などの情報によって形成される。また、外部から知識を得ることによってそれまでの認識が修正されることもある。しかし、受身的に外部からの情報を受け入れるだけでなく、自分の活動によって得られる知覚情報に意味を持たせること、知覚情報から自己の認識の枠組みを確認することこそが、「個の確立」として重要である。したがって、自己の認識を吟味できるような実際の体験を持つということは重要なことなのである。実体験として自分の中に確かな知覚を生みだし、そこから自己の持つ認識の世界を検証することを「運動する」ことの中で注目しなければならない。

今日、ともすると運動の場面では、いかに行動すべきかを指示され、「運動する者」はその指示に従い指令を「遂行する者」として見られることがある。「認識する者」あるいは「指令する者」と「運動する者」が分業化されていると見ることができ。このような場面では、実際には上述の「運動する」ことの意味は十分に成されず、人間をエネルギー出力機関としてのみ見ていることになり、「個の確立」は果たせないのである。

### III. 「フィールド・ワーク」という側面

「運動する」ということは、自分の身体で

環境に対応することである。通常、機械類を使って環境を操作する場合には用いない言葉である。知らなければならないことは知覚情報と自己の関係、あるいは知覚情報と環境の関係についてである。ここで重要なことは、それらが一般的にどのように説明されるかということではなく、自己にとってどうであるかということなのである。自己との関係において認識されなければ、それは自己の運動として遂行できないものである。

外部から与えられる知識はあくまでも一般的なものである。一般的な知識や情報はその性格上、固体差や状況の違いを排除して作られる。そのような知識や情報に基づいて認識が形成されると、人々の認識が画一的なものになったり、あるいはそれらの知識や情報が自己との関係が曖昧なままになる恐れがある。そのような知識や情報を自分のものとするためには、自分の身体を通し、体験を通し、一般的な知識を固有の知識へと変換しなければならない。一般的な知識や情報に固体差や状況差についての補正がなされなければならないのであり、固有の認識世界と噛み合うものにしなければならない。

体育はまさに自分の身体を駆使して学ぶという特長を持つものである。そこで学ぶべきことは教材として示される技術や知識ではない。もしそうであるならば、体育の究極の目的はスポーツ技術やルールの継承にとどまってしまう。暗記すべき知識も、当てはめるべき公式もない。それらに代わって学ばなければならないことは、固体差や状況差を排除する以前の、ありのままの現実である。

「運動する」ということは、生物としていきいきと生活すること、自分自身の体全体であらゆる機能を総動員して生きているということを知覚することである。身体を活用することによって、自分の中に潜んでいる本来のものを知覚することである。「運動する」ことによって知覚を刺激し、知覚に注意を傾けなければならない。そして、その知覚情報を解釈しなければならない。

その解釈ができたとき、自分がその環境の中でどれだけのことができる存在であるかについて、知ることができるのである。「運動する」ことを通して自己と環境との関係を見だし、自己が環境に応答できるようになり、環境との関わりの中で自分が生きるというありのままの現実を学ぶことによって、自己を学ぶのである。

この現実を探索する糸口として教材が配置されるのである。このことは言葉の暗記や公式の当てはめに慣れてしまった子ども達には大変に異質な事として受け止められるかも知れない。

自己と環境は、いわば「図」と「地」のようなものであり、「図」をよく浮き立たせるためには、「地」についての認識も重要である。すなわち、自分の体のもつ構造的、機能的な本質を探ると同時に、自分を成り立たせる環境についても探っていく行かなければならない。認識すべきことを運動や身体あるいはスポーツということに限らず、従来の体育の枠組みを超えて、人間が生きるということの事実まで向かなければならない。人間と環境との生命的な関わりについて学ぶことができるのである。

「運動する」ことは、外部から与えられる画一的な知識によって、モザイク的に認識を構成するのではなく、身体とこれを取り囲む環境の間に営まれる、生きるという現実をフィールドとして、ここから情報を獲得して認識を形成する作業なのである。「運動する」ことでそれぞれが一律ではない個性を持つ人間であり、生きることにに対してそれぞれの個性が十分に発揮される可能性を確認できるに違いない。また、自己について掘り下げ、拡大身体としての人間<sup>①</sup>、地球、宇宙へと考察を広げ、自身の成立ちを知ることができる。すなわち、「運動する」ことは自己について、そして環境について直接的に知覚情報から学ぶ、一つのフィールド・ワークであると言える。

#### IV. 「ボディー・センサー」という考え方.

運動に必要な情報は、外部から提供される知識ではない。自己の知覚情報である。そして、「運動する」ことに関与する能力の特徴は、運動することによって引き起こされる知覚情報を的確に処理する能力である。外部から提供される知識や情報を2次情報・3次情報と言うならば、自己の知覚情報を1次情報とすることができる。1次情報、あるいは1次情報から形成する認識に注目することが体育活動の特徴である。遂行すべき運動の計画段階での情報処理、遂行に伴う身体の内・外部の状況の変化の情報処理、そして計画の調整や変更、さらに目的の達成の度合についての認識等を、自己の知覚情報に基づいて処理しなければならないのである。

本来、体育で養うべき能力は、当然このような能力を根底に想定しているのであろう。著者らは、この能力を敢えて「ボディー・センサー(Body-sensor)」と呼ぶこととする。「ボディー・センサー」は知覚という原初的な情報から意味を形成する能力である。自己と環境を結ぶ身体を、自己と環境を結ぶ感覚器そのものと解釈するというのである。

「ボディー・センサー」は、1次情報から認識を形成する能力である。「ボディー・センサー」は、解剖学的、生理学的あるいは心理学的な意味でいう感覚器的ということではない。個々の感覚器に注目することにとどまらず、自分自身を感覚器とすることであり、自己の知覚を自分自身のフィルターを通して、自分のものとして再構成する能力である。この能力は知覚情報に対する解釈コードの集積に由来すると解釈すべきである。したがって、「ボディー・センサー」は、運動の計画の段階における目標基準値の設定から、結果の評価という過程を完結することによって改善されてゆくものと言えよう。

このような意味からすれば、体育における指導は身体との対応ではなく、学習者の「ボディー・

センサー」との対話を通して進められなければならない。学習者がいかに目標基準値を設定することができるか、その目標達成に対してどのような遂行過程をプランニングしたか、さらに結果をどのように受け止めているかということに注意して指導がなされなければならない。指導者の基準に基づいて指示がなされ、学習者はこれに従い、さらに指導者がこれを評価するという図式の中では「ボディー・センサー」は十分に養われない。

「ボディー・センサー」を駆使するということは、外から与えられる客観情報でなく、自分の内部に生じる知覚から主体的な意味を引き出すことである。つまり、このことが体育活動の特徴である。客観的な知識さえも、自分の活動の中では主観として映り、自分の感覚でしか認められない存在である。自分の感覚を確かなものにし、自分の感覚に自信を持てるようになるということは重要な課題である。それは、環境に対する自分の振舞いに対して自分の体で責任を持つということだからである。

したがって、自分の主観を確かなものであるか否かを確認する能力として、「ボディー・センサー」を養うことが現代社会の重要な課題となる。

#### V. まとめ

科学技術が発達する中で、身体に対する意識が変化している。健康な状態を維持することへの意識は高まりつつある。しかし、社会的な場で身体を活用することは少なくなっており、「運動する」ことの意味は、身体という物質の性能の向上あるいは形態の改善に限定される傾向がある。

体育活動で行うことは、身体運動や健康という問題について自らが考えることができる「からだ」を養うことである。権威ある者によって健康であると定義された身体を作ることだけでもなければ、体力的に優れた身体を作ることだけでもない。そのためには、自分自身で「からだ」の意味づけが出来なければならない。自らが一個の人間として、

自らの身体あるいは運動能力を自己の認識の中で位置づけ、コントロールできるような「からだ」を育まなければならない。

そのためには、運動することによって、自己の認識を吟味することがなされなければならない。そのために「ボディー・センサー」すなわち、知覚という1次情報から主体的な意味を形成する能力を養わなければならない。

生活の中で常に専門家の知識や計器類だけに依存して生きるのではなく、身体を持つ感受性を活性化し、意味を見いだせる「からだ」を形成することである。すべての身体の機能を駆使して、生きるという実感を取り戻すことにこそ意味があるのである。

体育は物質としての身体的側面に注目するだけではなく、運動する場面において自己感覚を養うことに注目しなければならない。つまり体育は「ボディー・センサー」を養うプログラムである。自己と環境はそのまま「知」の対象としての「フィールド」である。自分の身体を活用する場が少なくなり、また自己の主観が身の置き場を失っている現代社会において、「運動する」ことは自分の感覚を通して自己を取り戻すことのできる貴重な場面にはかならない。

このことは現代の科学技術や客観的科学的な知識を否定することではない。科学技術の発達した時代の中であるからこそ、自己を見失うことなく生きてゆく態度を形成することが必要とされるのである。したがって、体育が「ボディー・センサー」に注目し、身体感覚から主体的な意味を引出し、自己について認識を深めようとする立場に立つとき、それは主要な教育活動となるのである。

「運動する」ことに伴う認識に着目したとき、体育の関わる「知」の領域、体育の養う能力に新しい局面を見いだすことができる。今後、より具体的な方法の提示を目指して研究を進めたい。

## 参考文献

- (1) 森岡正博:生命学への招待ーバイオエシックスを超えてー、勁草書房、(1988)
- (2) 野村幸正、井上道雄:サバイバル・エコロジーー生存と認識からの出発、福村出版、(1985)
- (3) 滝沢文雄:「『身体の理論』序説ー前川峰雄の身体論を手掛りにー」、体育学研究、Vol. 31-No. 2:pp. 101-111、(1986)
- (4) 滝沢文雄:「身体の理論性」、体育・スポーツ哲学研究、Vol. 8:pp. 26-43、(1986)
- (5) 滝沢文雄:「身体の構造化ー身体運動への現象学的アプローチ」、体育学研究、Vol. 32-No. 4:pp. 211-219、(1986)